第 357回 昭和の森自然観察会

タ ネ の 旅

玉川弘幸（千葉市）

日　時：2021 年 11 月 14 日（日）10 時～12 時　　天候：晴れ
参加者：16 名（大人 8 名、子ども 8 名、）、指導員 6 名　事務所 1 名　　計 23 名
担当指導員：畫間　武田　玉川

朝から好天に恵まれ、参加者には受付、検温を済ませた後、東屋に展示しておいたタネのサンプルを見てもらった。 子どもたちは初めて目にする様々な形の種に興味津津。 3 つにグループ分け、1 班は両親と兄と妹の 4 名。 観察に入る前に植物がどの様な方法でタネを散布するのかを話してから出発した。 先ず東屋脇のケヤキから観察。 早速、母親が根元の落ち葉の中から小枝に付いたケヤキのタネを見つけ出した。 タネ付きの枝を空に向けて放り投げると、タネはクルクル回りながら落ちてきた。風に乗れば遠くに運ばれて行くだろう（風散布）。 冒険広場に続くツツジの植込みの縁には鳥に運ばれたシラカシやエノキの実生苗が多く見られた。風でどこからか運ばれて来たのか、セイタカアワダチソウも植込みの中から顔を出している。 大きな葉を付けているハクウンボクの横に赤と黒の鮮やかなコントラストのゴンズイが見える。 下見の時には枝に垂れ下がっていたハクウンボクのタネが当日は見られなかった。 飛び交っているヤマガラの仕業だろうか。 それでも落ち葉の中から 2 つばかりタネを見つけることができた。 冒険広場にはたくさんのオオバコが生えている。 この草、踏まれると実の中のタネを出し、濡れるとゼリー状になり靴などに貼りつき、あちこちに運ばれる。 カップにオオバコの実を入れて水を加えて揉んでみると、なるほどべた付いた。 子どもたちも真剣にチャレンジ。広場をぬけて、林縁脇の草むらに布を被せ、どんなものが付着するか実験してみた。 イノコヅチやチヂミザサ、ミズヒキなどの「ひっつきむし」が付着していた。 動物の毛や服の繊維にひっついて運ばれることがわかる。 反対側の植込みには、タネやむかごの付いたヤマノイモのつるが絡み付いていた。イロハモミジの木の下ではタネを飛ばして遊んだ。 タネはプロペラが 1 個の方が高速回転で落下する。 市町村の森に入り、サザンカの植込みの中に赤い実のカラスウリを見つけた。 持参したカラスウリの中からゼリーに包まれたタネを取り出して観察。 子ども達に、このタネ何に似てるかなと聞くと、クロワッサンと言う返事が返ってきた。 赤い実は鳥にとって恰好の標的だろうか。 数本ある二期咲きのコブクザクラが白い花を咲かせている。 カシワ、クヌギ、イチョウの実生苗を探していたら、植込みの中にイチョウの実生苗がいくつか見られた。 ここで、今日のお土産として、参加されたご家族に銀杏の実を渡して タネの観察会を終えた。 参加者の方から、子どもたちが出来る、草花を使った簡単な遊びも観察会に取り入れてほしいとの要望がありました。

植込みの中にエノキの実生苗を見つけた

カエデのタネは風に乗って飛んでゆくかな